〔論　文〕

短期大学生の高齢者イメージと認知症高齢者イメージ
―介護実習前後の比較―

Junior College Students' Perceptions of the Elderly and demented elderly before and after working in nursing home

柴　田　雄　企
Shibata Yuki

ABSTRACT

The purpose of this study is to compare the students' images and views of the elderly and the demented elderly people before and after having worked in a nursing home. Nineteen pairs of adjectives were presented to 42 subjects. The subjects were divided into two groups. One group consisted of 19 students who had experience of the care before participating in the nursing practice, and the other group consisted of 23 students who did not. The results showed that the images of the elderly and demented elderly held by the junior college students did not change very much after the nursing practice.

Key words: images of the elderly, images of the demented elderly, junior college student, nursing practice, semantic differential method

問題と目的

人々の高齢者観は、その社会で高齢者がおかれている状況を反映し、また高齢者自身の自己概念や適応にも大きな影響を及ぼすことが指摘されている（古谷野、1993）。

高齢者イメージについての研究はこれまでに多くなされてきている。中野ら（1994）は小中学生の高齢者との交流と老人イメージとの関連について検討し、年齢が小さい時に祖父母や老人と好ましい経験を多く持っていると、現在の老人イメージが肯定的になるとの結果を得ている。また、矢島（2001）は小学生を対象に、老人ホーム訪問体験やライフサイクルについての授業を受けた経験が老人イメージに与える影響を検討し、描画テストの結果から、老人ホーム訪問体験によって、表情、動きが老人らしい絵を描く児童が増えたことを報告している。

また、青年期の高齢者との接触経験の高齢者イメージへの影響についても研究がなされている。大学生の老人イメージの規定要因としては、老人と話す機会、老人や老人問題に対する関心（保阪・袖井、1986）や祖父母との接触などの個人経験（保阪・袖井、1988）

の重要性が指摘されている。滝川ら（1999）は「老年看護学概論」の授業前後での看護学生の高齢者イメージの変化を調査し、授業前に比べ、授業後は高齢者イメージが肯定的な方向に変化したと報告している。水沼ら（2005）は、鍼灸学部学生の高齢者イメージについて、老人ホーム実習の影響を検討している。その結果、対象者の56％が実習後に高齢者イメージが変わっており、プラス・イメージへ変化した者はそのうちの約55％であったとのことである。これらの研究から、青年期における高齢者との接触経験も高齢者イメージに影響することがうかがえる。

認知症高齢者に対するイメージについても研究報告がみられる。柴田（2004）は短期大学人文系学科の学生を対象に、認知症高齢者イメージを検討した。その結果、短期大学女子学生の認知症高齢者イメージは中立よりやや否定的であった。また、吉本ら（2004）は看護短期大学生の認知症高齢者に対するイメージを、学年（１～３年生）により比較したところ、１・２年生は認知症高齢者にマイナス・イメージを持っていたが、３年生はプラス・イメージを持っていたという結果を得ている。この結果については、３年生は実習の中で、１人の認知症高齢者を受け持ち、行動を共にすることによって、尊厳を持つ１人の人として捉えることができるようになったためではないかと考察がなされている。

古谷野（1993）による、人々の老人観はその社会で老人がおかれている状況を反映するとの指摘は認知症高齢者についても該当すると推測できる。人々の認知症高齢者に対するイメージは認知症高齢者が置かれている社会状況を反映すると思われる。また、人々の認知症高齢者に対する接し方が、認知症高齢者の自己概念や生活の中での行動にも影響を及ぼすと考えられる。

本研究では短期大学生を対象に、介護実習が高齢者イメージと認知症高齢者イメージに及ぼす影響について検討することにした。先行研究では、高齢者との接触経験が高齢者イメージを肯定的にすることが示唆されていることから、介護実習の前後では、高齢者イメージが肯定的に変化することが予想される。しかし、接触経験の高齢者イメージへの影響は、実習前の高齢者との接触経験の有無によって異なると考えられる。そこで、本研究では、実習前の介護経験の有無によって対象者を群分けし、高齢者イメージおよび認知症高齢者イメージの変化を比較することにした。

方　法

調査は教職のための介護等体験に参加する学生を対象に2004年６月～11月に行った。介護実習は教職免許取得のためのものであり、学生は福祉施設で５日間、福祉学校で２日間の実習を経験する。介護実習の前後に、高齢者イメージおよび認知症高齢者イメージなどについて、アンケートへの回答を求めた。実習後のアンケートでは、実習で体験した介護の内容についても尋ねた。

１．対象者

介護実習の前と後の両方のアンケートに回答していた、短期大学生42名（男性６名、女性36名、平均年齢18.29歳）を分析対象とした。

2．調査票の内容

実習前のアンケートでは、以下の(1)～(9)のうち、(1)高齢者とのこれまでの関わり、(2)高齢者についての知識、(3)認知症高齢者についての知識、(4)高齢者に対するイメージ、(5)認知症高齢者に対するイメージについて回答を求めた。実習後のアンケートでは、以下の(1)～(9)のうち、(4)高齢者に対するイメージ、(5)認知症高齢者に対するイメージ、(6)介護実習で体験した介護、(7)親の介護に対する態度、(8)認知症の人との心の交流、(9)介護実習の前後で高齢者および認知症高齢者に対する考えやイメージが変化したか（自由記述）について回答を求めた。なお、実習前後のアンケート結果を対応させるため記名を求めた。

(1)高齢者とのこれまでの関わり

祖父母との関わり、祖父母以外の高齢者との関わり、介護経験の有無について尋ねた。

(2)高齢者についての知識

高齢者についての一般的な知識を調べるために、詫摩（1991）の高齢者についての知識調査項目を用いた。○×形式の質問項目13問から成り、１問１点の13点満点とした（表２参照）。得点が高いほど、高齢者についての一般的知識を持っていると考えられる。

(3)認知症高齢者についての知識

認知症についての一般的な知識を調べるため、「老人性痴呆（ぼけ）に関する青少年の意識調査報告書」（財団法人ぼけ予防協会，2003）で用いられていた、認知症者への介護についての項目から抜粋し、使用した（なお、報告書で使用されている項目は聖マリアンナ医科大学認知症治療研究センター作成「正しい介護の豆知識」によるものである）。本研究では20問を用い、１問１点の20点満点とした（表３参照）。得点が高いほど認知症についての一般的知識を持っていると解釈される。問１～問６は２択問題で表３において下線のある方が正答である。問７～問９は記入式の問題である。問10～問20は○×クイズ形式の問題である。

(4)高齢者に対するイメージ

高齢者イメージを捉えるためにSemantic Differential method（以下、SD法）を用いた。SD法の形容詞対としては古谷野ら（1997）が用いたものと同じものを用いた（表１参照）。本研究の調査では、高齢者について「あなたはどのような印象を持っていますか」という質問に対して５件法で回答を求めた。対象者のイメージ評定は、表１の形容詞対の左側の形容詞に「とてもあてはまる」を１、「ややあてはまる」を２、表２の形容詞対の右側の形容詞に「ややあてはまる」を４、「とてもあてはまる」を５とし、「どちらともいえない」を３として数値化した。

表1　本研究で用いた形容詞対

受動的な	能動的な
暗い	明るい
頑固な	柔軟な
嫌いな	好きな
消極的	積極的
劣った	優れた
遅い	速い
枯れた	みずみずしい
きびしい	やさしい
下品な	上品な
弱い	強い
無愛想な	愛想のよい
地味な	派手な
冷たい	暖かい
鈍感な	敏感な
落ち着きのない	落ち着きのある
騒がしい	静かな
さびしい	にぎやか
不活発な	活発な

⑸ 認知症高齢者に対するイメージ

認知症高齢者イメージを捉えるために、高齢者イメージを捉える方法と同じ方法を用い、認知症高齢者についての印象を尋ねた。

⑹ 介護実習で体験した介護

介護実習で体験した介護の内容として、以下の項目について、それぞれ体験したかどうかを尋ねた。話し相手、食事介助、施設の掃除、食事の配膳、食事の片づけ、入浴介助、散歩の付き添い、車いすを押す、車椅子に乗せる、着替えの手伝い、シーツ交換、トイレ介助、リハビリの手伝い、おむつ交換、洗濯、その他。

⑺ 親の介護に対する態度

親が認知症になった場合、介護したいかどうか尋ねた。選択肢は「したくない」、「どちらかというとしたくない」、「どちらともいえない」、「どちらかというとしたい」、「したい」の５つを設けた。

⑻ 認知症の人との心の交流

認知症の人との心の交流ができると思うかどうか尋ねた。選択肢は「できると思う」、「どちらともいえない」、「できないと思う」の３つを設けた。

⑼ 介護実習の前後で高齢者や認知症高齢者に対する考えやイメージが変わったか自由記述をもとめた。

結　果

対象者を介護実習前の介護経験の有無によって２群に分けた。介護経験があった者（介護経験あり群）が19名（45.2％）で、なかった者（介護経験なし群）が23名（54.8％）であった。介護経験あり群は女性16名、男性３名、平均年齢18.26歳であった。介護経験なし群は女性20名、男性３名、平均年齢18.30歳であった。以下、調査結果を群ごとに示す。

１．対象者の特徴

⑴ 祖父母との関わり

祖父母との関わりについて尋ねた結果、介護経験あり群では、「よくある」と回答した者が13名（68.4％）、「ときどきある」が１名（5.3％）、「ほとんどない」が４名（21.1％）、「まったくない」が１名（5.3％）であった。介護経験なし群では、「よくある」が10名（43.5％）、「ときどきある」が９名（39.1％）、「ほとんどない」が２名（8.7％）、「まったくない」が２名（8.7％）であった。

⑵ 祖父母以外の高齢者との関わり

祖父母以外の高齢者との関わりについて尋ねた結果、介護経験あり群では、「よくある」と回答した者が５名（26.3％）、「ときどきある」が６名（31.6％）、「ほとんどない」が４名（21.1％）、「まったくない」が４名（21.1％）であった。介護経験なし群では、「よくある」が３名（13.0％）、「ときどきある」が７名（30.4％）、「ほとんどない」が10名（43.5％）、「まったくない」が２名（8.7％）であった。

⑶ 高齢者についての知識

高齢者についての知識についての回答結果を表２に示した。なお、１問１点なので、各項目における平均値の100倍がそれぞれの項目における正答率を表すことになる。実習前の高齢者についての知識を、介護経験の有無によって比較した。結果、どの項目においても両群間で有意差はみられなかった。13問中の正答数の平均値は、介護経験あり群が5.95、介護経験なし群が6.91であり、有意差はみられなかった。

表２　高齢者についての知識の結果

項　　目	介護経験あり群	介護経験なし群
問１　65歳以上の人の中で、90歳以上の人の占める割合は約10％である（×）	0.47	0.57
問２　大多数の高齢者は70歳を越える頃からぼけ始める（×）	0.63	0.83
問３　75歳以上の男性の半分は１年間に１日も床についていない（○）	0.11	0.00
問４　年間に死亡する日本人の70％は65歳以上の人である（○）	0.32	0.52
問５　肉体的な力は高齢者になると衰えがちである（○）	0.95	0.91
問６　少なくとも１割の高齢者は養護老人ホームなどに長期入所している（○）	0.21	0.04
問７　ほとんどの高齢者は自分の型にはまっていて、それを変えることが難しい（×）	0.05	0.26
問８　65歳以上で自動車を運転する人は若い人より事故を起こす率は低い（○）	0.26	0.43
問９　およそ８割の高齢者は健康で、普通の生活を送るのに差し支えない（○）	0.26	0.48
問10　高齢者は何か新しいことを学ぶのに、若いひとより時間がかかるものである（○）	0.84	0.78
問11　ほとんどの高齢者は、現在、働いているか、あるいは家事や奉仕活動などでも、何か仕事をしたいと思っている（○）	0.63	0.83
問12　大多数の高齢者は社会的に孤立している（×）	0.37	0.57
問13　ほとんどの高齢者は、若い人より反応時間が遅くなる（○）	0.84	0.70
合　計（13問中の平均正答数）	5.95	6.91

⑷ 認知症高齢者についての知識

認知症高齢者についての知識についての結果を表３に示した。なお、１問１点なので、各項目における平均値の100倍がそれぞれの項目における正答率を表すことになる。実習前の認知症高齢者についての知識を、介護経験の有無によって比較した。その結果、問９と問12において有意差がみられた。問９では介護経験なし群の方が介護経験あり群より正答率が高かった。問12では介護経験あり群の方が介護経験なし群より正答率が高かった。問４、問７では両群の標準偏差が０のため、ｔ値は計算できなかった。

表３　認知症高齢者についての知識の結果

項　　目	介護経験あり群	介護経験なし群	t 値
問１ 認知症の初期は物忘れを自覚（している・していない）	0.37	0.35	.14
問２ 抗認知症薬を投与すると認知症は（治る・治らない）	0.95	0.78	1.61
問３ （アルツハイマー病・脳血管性障害）の原因は脳梗塞である	0.74	0.74	.02
問４ 認知症はまず（古い・新しい）出来事から忘れる	1.00	1.00	
問５ 認知症には物忘れなどの（中核症状・周辺症状）と、感情障害や問題行動などの（中核症状・周辺症状）がある	0.21	0.22	.05
問６ アルツハイマー病の発症頻度は１：３で（女性・男性）に多い	0.74	0.78	.34
問７ アルツハイマー病の死亡原因の第一位は（　　）である（肺炎）	0.00	0.00	
問８ アルツハイマー病は、脳の全体にわたって（　　）が死んでいくものである（脳神経細胞）	0.58	0.78	1.40
問９ 認知症のケアには、身体面のケアと（　　）のケアがある（心理面、精神面）	0.63	0.96	2.67*
問10 認知症症状がより強く現れるのは、より身近な者に対してである（○）	0.84	0.78	.48
問11 アルツハイマー病の発病から末期までは平均すると５年間である（×）	0.63	0.70	.43
問12 うつ病でも、認知症に似た症状を示す事がある（○）	0.74	0.43	2.04*
問13 計算が苦手になってくるので、訓練した方がよい（×）	0.53	0.30	1.46
問14 現実にありえないようなことを話したら、訂正した方がよい（×）	0.79	0.61	1.28
問15 新しい場所へ外出するなど毎日違う刺激を与えた方がよい（×）	0.32	0.17	1.04
問16 自発的に覚えるように、カレンダーや時計は本人の目の届かない所に置く方が良い（×）	0.74	0.78	.34
問17 生活の中で大切なことは張り紙で表示するとよい（○）	0.89	0.83	.62
問18 慢性アルコール中毒も認知症につながることがある（○）	0.63	0.52	.70
問19 知的障害や急性の意識の障害などで起きている認知障害も認知症の一つである（×）	0.68	0.43	1.63
問20 アルツハイマー病といっても、人によって症状が違う（○）	0.79	0.96	1.58
合　計（20問中の平均正答数）	12.79	12.13	.88

* $p < .05$

2．介護実習での実習内容

両群の対象者が介護実習で経験した介護についての回答を表４に示した。本研究の対象者の多くが経験していた実習内容は、話し相手になること、施設の掃除、食事の配膳、食事の片づけ、車椅子を押すことであった。両群の間に、介護実習中の経験の大きな違いはみられなかった。

表４　介護実習で経験した介護（経験者数と経験者の割合）

項　　目	介護経験あり群		介護経験なし群	
話し相手	19	(100.0%)	23	(100.0%)
食事介助	9	(47.4%)	11	(47.8%)
施設の掃除	16	(84.2%)	19	(82.6%)
食事の配膳	17	(89.5%)	22	(95.7%)
食事の片づけ	16	(84.2%)	17	(73.9%)
入浴介助	10	(52.6%)	8	(34.8%)
散歩の付き添い	7	(36.8%)	7	(30.4%)
車椅子を押す	15	(78.9%)	21	(91.3%)
車椅子に乗せる	9	(47.4%)	8	(34.8%)
着替えの手伝い	11	(57.9%)	12	(52.2%)
シーツの交換	5	(26.3%)	7	(30.4%)
トイレの介助	6	(31.6%)	4	(17.4%)
リハビリの手伝い	5	(26.3%)	3	(13.0%)
オムツ替え	6	(31.6%)	2	(8.7%)
洗濯	7	(36.8%)	9	(39.1%)
その他	1	(5.3%)	4	(17.4%)

3．高齢者イメージ

介護経験あり群と介護経験なし群の実習前後の高齢者イメージの評定値を表５に示した。介護経験の有無（被験者間）および介護実習前後（被験者内）を独立変数とし、高齢者イメージの評定値を従属変数とした２要因分散分析を行った。その結果、介護実習前後の主効果が「受動的なー能動的な」（$F(1, 39) = 8.02$, $p<.01$）、「暗いー明るい」（$F(1, 40) = 5.52$, $p<.05$）、「地味なー派手な」（$F(1, 40) = 11.26$, $p<.01$）、「さびしいーにぎやか」（$F(1, 40) = 5.41$, $p<.05$）においてみられた。介護経験の有無の主効果および交互作用はみられなかった。

表５　両群の実習前後の高齢者イメージの評定値と標準偏差

形　容　詞　対	実習前後	介護経験あり群	介護経験なし群
受動的なー能動的な	前	2.83（0.62）	2.70（0.82）
	後	3.06（1.06）	2.96（0.71）
暗いー明るい	前	3.16（0.60）	3.26（0.96）
	後	3.42（0.69）	3.74（0.86）
頑固なー柔軟な	前	2.58（0.84）	2.00（0.76）
	後	2.37（0.83）	2.45（0.86）
嫌いなー好きな	前	3.47（0.61）	3.23（0.69）
	後	3.53（0.61）	3.45（0.80）
消極的ー積極的	前	2.89（0.74）	2.87（1.01）
	後	3.00（0.88）	2.74（0.75）
劣ったー優れた	前	2.89（0.57）	3.36（1.09）
	後	2.89（0.88）	3.00（0.93）
遅いー速い	前	2.11（0.68）	1.87（0.63）
	後	2.00（0.59）	1.91（0.52）
枯れたーみずみずしい	前	2.53（0.61）	2.26（0.96）
	後	2.63（0.60）	2.35（0.57）
きびしいーやさしい	前	2.78（1.00）	3.39（1.16）
	後	3.17（0.99）	3.30（1.11）
下品なー上品な	前	3.11（0.74）	3.22（0.90）
	後	3.26（0.56）	3.57（0.79）
弱いー強い	前	2.53（0.84）	2.36（1.00）
	後	2.68（0.82）	2.77（0.92）
無愛想なー愛想のよい	前	3.26（0.65）	3.09（1.00）
	後	3.47（0.77）	3.61（0.89）
地味なー派手な	前	2.42（0.61）	2.61（0.58）
	後	2.84（0.50）	2.96（0.71）
冷たいー暖かい	前	3.58（0.61）	3.57（1.04）
	後	3.63（0.68）	4.09（0.73）
鈍感なー敏感な	前	2.68（0.89）	2.74（0.75）
	後	2.68（0.75）	2.87（0.76）
落ち着きのないー落ち着きのある	前	3.74（0.93）	3.83（0.94）
	後	3.37（0.90）	3.87（0.92）
騒がしいー静かな	前	3.53（0.84）	3.74（0.81）
	後	3.32（0.82）	3.74（0.75）
さびしいーにぎやか	前	2.47（0.51）	2.43（0.95）
	後	2.89（0.88）	2.96（0.83）
不活発なー活発な	前	2.63（0.96）	2.74（0.81）
	後	3.00（0.67）	2.91（0.73）

4．認知症高齢者イメージ

介護経験あり群と介護経験なし群の実習前後の認知症高齢者イメージの評定値を表６に示した。

表６　両群の実習前後の認知症高齢者イメージの評定値と標準偏差

形　容　詞　対	実習前後	介護経験あり群	介護経験なし群
受動的な－能動的な	前	2.68（1.00）	2.52（1.04）
	後	2.42（0.69）	2.74（0.86）
暗い－明るい	前	2.74（0.81）	3.00（1.00）
	後	3.05（0.85）	3.22（0.85）
頑固な－柔軟な	前	2.37（0.96）	2.35（1.07）
	後	2.42（0.84）	2.35（0.94）
嫌いな－好きな	前	2.74（0.56）	2.77（0.87）
	後	2.84（0.50）	2.77（0.69）
消極的－積極的	前	2.89（0.88）	2.74（1.01）
	後	2.58（0.77）	2.96（1.11）
劣った－優れた	前	2.37（0.60）	2.39（1.12）
	後	2.42（0.61）	2.57（0.51）
遅い－速い	前	2.32（0.82）	2.39（0.89）
	後	2.42（0.77）	2.39（0.72）
枯れた－みずみずしい	前	2.84（0.69）	2.65（0.83）
	後	2.74（0.45）	2.39（0.66）
きびしい－やさしい	前	2.63（0.90）	2.87（0.76）
	後	2.95（0.85）	2.96（0.77）
下品な－上品な	前	2.68（0.58）	2.70（0.82）
	後	2.79（0.54）	2.74（0.69）
弱い－強い	前	2.37（0.83）	2.35（0.98）
	後	2.42（0.69）	2.48（0.79）
無愛想な－愛想のよい	前	2.58（0.69）	2.91（0.90）
	後	2.68（0.75）	2.83（0.83）
地味な－派手な	前	2.63（0.60）	2.52（0.67）
	後	2.89（0.46）	2.87（0.46）
冷たい－暖かい	前	2.74（0.56）	3.13（0.92）
	後	2.95（0.62）	3.09（0.95）
鈍感な－敏感な	前	3.26（0.99）	3.09（1.24）
	後	2.37（0.76）	2.78（0.90）
落ち着きのない－落ち着きのある	前	2.11（0.74）	2.36（1.09）
	後	2.32（0.95）	2.27（0.99）
騒がしい－静かな	前	2.47（0.84）	2.65（1.07）
	後	2.89（0.74）	2.61（0.78）
さびしい－にぎやか	前	2.84（0.83）	2.74（0.86）
	後	2.68（0.89）	2.83（0.72）
不活発な－活発な	前	3.00（0.94）	3.00（1.04）
	後	3.11（0.57）	3.09（0.79）

介護経験の有無（被験者間）および介護実習前後（被験者内）を独立変数とし、認知症高齢者イメージの評定値を従属変数とした２要因分散分析を行った。その結果、介護実習前後の主効果が「地味な－派手な」（$F(1, 40) = 5.03$, $p<.05$）、「鈍感な－敏感な」（$F(1, 40) = 12.30$, $p<.01$）においてみられた。介護経験の有無の主効果および交互作用はみられなかった。

５．親の介護に対する態度

「あなたの親が認知症になったら、世話したいと思いますか」と尋ねた。その回答結果を表７に示した。

表７　親が認知症になったら世話したいか

選　択　肢	介護経験あり群 (n=19)	介護経験なし群 (n=21)
したくない	1　(5.3%)	2　(8.7%)
どちらかというとしたくない	2　(10.5%)	3　(13.0%)
どちらともいえない	4　(21.1%)	11　(47.8%)
どちらかというとしたい	2　(10.5%)	2　(8.7%)
したい	10　(52.6%)	3　(13.0%)

６．認知症の人との心の交流

認知症の人と心の交流ができると思うか尋ねた。その回答結果を表８に示した。

表８　認知症の人との心の交流はできるか

選　択　肢	介護経験あり群 (n=19)	介護経験なし群 (n=21)
できると思う	12　(63.2%)	8　(34.8%)
どちらともいえない	7　(36.8%)	13　(56.5%)
できないと思う	0　(0.0%)	2　(8.7%)

考　察

本研究では、高齢者および認知症高齢者イメージへの介護実習の影響について調査した。介護実習へ参加する前に介護経験のあった者は介護実習の影響が少ないと考え、対象者を２群に分けた。介護実習前に調査した、高齢者および認知症高齢者についての一般的知識では両群間に有意差はほとんどみられなかった。また、介護実習で体験した介護内容についても大きな差異はないと見受けられた。両群の高齢者および認知症高齢者イメージを介護実習の前後で比較するため、２要因の分散分析を行なった。

その結果、高齢者イメージについては、４つの形容詞対において、介護実習の主効果が認められた。すなわち、「受動的な－能動的な」、「地味な－派手な」、「さびしい－にぎやか」において、実習前のやや否定的イメージから中立的イメージへと変化がみられた。また、「暗い－明るい」で中立的イメージから肯定的イメージへと変化がみられた。全般的に、介護実習の前後で、高齢者イメージはあまり変化していなかった。しかし、介護実習

の前は、やや受動的で地味なさびしい高齢者イメージを抱いていたのが、介護実習後には、それらの形容詞対ではどちらともいえないというイメージへと変化していた。また、介護実習を通して、明るい高齢者イメージを持つようにもなっていた。

松下（2010）は、古代からマイナスとプラスのイメージを持った両極端に分かれる高齢者像があったが、いまや、その両極端にわたる像をもって、高齢者を描くことはほぼ不可能であると述べている。そして、その理由としては、昔は高齢者が少なく、ときには希少な存在であったが、現代では人口の多くを高齢者が占めるようになったという状況の変化によるところがおそらく大きいという。一般的な高齢者像として、単一のものを描くことができないという指摘には筆者も同意する。しかし、個々の高齢者や、ある場面においては、プラスあるいはマイナスのイメージを持つ傾向はあるように思える。少なくとも認知症高齢者に対しては、一般的にもやや否定的なイメージを持ちがちであり、そのことが介護者や認知症高齢者自身に全く影響を及ぼさないとは考えにくい。

認知症高齢者イメージについては、２つの形容詞対において、介護実習の主効果が認められた。介護実習の前は、やや地味なイメージを持っていたが、実習後は中立的イメージへ近づいていた。一方で、「鈍感なー敏感な」においては、中立的イメージからやや鈍感なイメージへと変化していた。認知症高齢者イメージも全般的には、介護実習によって、ほとんど変化していなかった。実習前に抱いていた認知症高齢者イメージと、実習中に認知症高齢者と接して受けた印象との間にそれほど差異がなかったためかもしれない。介護実習の期間が短かったためかもしれない。また、学生が介護した高齢者の要介護度が多様であったことも結果に影響していると考えられる。

SD法による認知症高齢者イメージの測定では、両群間にほとんど差異は見られなかったが、実習後のアンケートでの、「親が認知症になったら世話したいか」と「認知症高齢者との心の交流はできるか」への回答においては差異がみられた。実習前に介護経験のあった者の方が、なかった者より、親が認知症になったら世話したいという回答が多く、認知症の人と心の交流ができると思うという回答も多かった。これらの結果は、介護経験の多い者の方が、認知症高齢者とのコミュニケーションの可能性を感じており、それが介護に対する効力感につながっていることを示唆していると思われる。

また、介護実習の前後で高齢者や認知症高齢者に対する、あなたの考えやイメージは何か変わりましたか？という質問に対する自由記述では以下のようなものがみられた。「高齢者は若者にすごく厳しいイメージがあったけれど、優しい高齢者も多かったです」、「もっとおっとりしてて、あたたかいイメージだったけど、キビキビしている人もいたり、無愛想な人もいたので、いろんな人がいるんだなぁと感じた」など（介護経験あり群）。「自分たちとあまり変わらないんだなと思いました」、「認知症高齢者にもいろんな人がいることがわかった」など（介護経験なし群）。自由記述から、介護実習によって、自分の高齢者に対する認識が変化したと実感している者もいたと言える。

引用文献

保坂久美子・袖井孝子　1986　大学生の老人観　老年社会科学，8，103－116
保坂久美子・袖井孝子　1988　大学生の老人イメージーＳＤ法による分析　社会老年学，

27，22－33
古谷野亘　1993　老いに対する態度（柴田　博・芳賀　博・長田久雄・古谷野亘編）老年学入門：学際的アプローチ，pp．177-184　川島書店
古谷野亘・児玉好信・安東孝敏・浅川達人　1997　中高年の老人イメージ―SD法による測定―　老年社会科学，18（2），147-152
松下正明　2010　現代における多様な高齢者像　認知症ケア事例ジャーナル，3(1)，99－104
水沼国男・高橋則人・鶴　浩幸・松本　勅　2005　鍼灸学部学生の高齢者イメージに関する研究―老人ホーム実習による変化―　全日本鍼灸学会雑誌，55（1），68-76
中野いく子・冷水　豊・中谷陽明・馬場純子　1994　小学生と中学生の老人イメージ―SD法による測定と比較―　社会老年学，39，11-22
滝川由美子・吉本知恵・横川絹恵　1999　看護学生の高齢者イメージの変化－老年看護学概論の授業前・後の比較　香川県立医療短期大学紀要，１，51－60
詫摩武俊　1991　これからの老い　老化の心理学，pp．14-15　講談社
矢島直子　2001　児童の老人イメージに関する研究－体験学習による老人イメージの変容について－　学校メンタルヘルス，4，87－93
財団法人ぼけ予防協会　2003　老人性痴呆（ぼけ）に関する青少年の意識調査報告書　財団法人ぼけ予防協会

謝辞

本研究の調査にご協力いただきました皆様に深謝いたします。